

2011年度 松蔭中学校 高等学校 学校関係者評価報告

松蔭中学校 高等学校
学校関係者評価委員会

松蔭中学校高等学校は、2011年度学校関係者評価委員会を設置しました。委員は保護者代表、併設大学代表、卒業生代表、その他学校関係者として校長が委嘱する者です。今年度は、7名の委員により構成され、委員会には校長、副校長、事務長も同席しました。

この報告は、分掌（各学年担任団、校務担当各部）ごとに実施した「2010年度学校自己評価」、生徒及び保護者による「学校評価アンケート」（以下、アンケート）、当委員会委員による学校見分（施設見学・授業参観）にもとづき、学校運営の改善を図るために実施した「学校関係者評価」です。

委員会は次の3点を中心に検討し、下記の内容をとりまとめて委員会報告としました。

- ・キリスト教主義を柱とする人間教育が行われており、人格形成に寄与しているか。
- ・学校生活のなかで健全な人間関係を構築する指導を実施し、その効果があがっているか。
- ・豊かな学力定着と進路実現をはかる教育が行われ、その効果があがっているかどうか。

(1) キリスト教主義を柱とする人間教育が行われており、人格形成に寄与しているか。

宗教教育・キリスト教育に関してアンケートでは次の3項目がありました。

「入学後、キリスト教に対する理解が深まってきたと思う」
「そう思う」「ややそう思う」という肯定的評価 中学生 48%、高校生 45%

「週1回の朝の礼拝の時間は自分を見つめる良い機会となっている」
「そう思う」「ややそう思う」という肯定的評価 中学生 30%、高校生 20%

「宗教週間の行事、奉仕活動は自分を見つめる良い機会になっている」
「そう思う」「ややそう思う」という肯定的評価 中学生 27%、高校生 20%

このアンケート結果により、まず第一に礼拝や宗教週間の行事などを通じた様々な活動に対して、生徒の側からの肯定的評価が少なく、第二に高校進学後には、キリスト教に関する認識、理解が深まるはずですが、逆に肯定的評価の割合が下がってしまっていることがわかります。

現在、聖書を学ぶことについては、カリキュラムの1教科として位置づけられ、定期考査により成績を点数化し、評価点が出されています。これは、生徒の積極的な学習を促進するために導入されたもので、生徒は聖書やキリスト教についての様々な知識を得ます。聖書の授業を選択科目の1つとするミッションスクールが増加しているなかで、松蔭では中高6か年の間、必修科目として学びます。様々な機会に触れる聖句や知識が、卒業後に折に触れ思い浮かぶ、と多くの卒業後が語っていることから、定着した聖書の知識は、その後の人生においても大きな意味を持つようになると思われます。

一方、同項目の保護者回答では、肯定的評価が50%を超え、生徒の回答とは差異があります。子どもの人格形成に資する宗教教育・キリスト教主義教育への保護者の期待と見ることができます。

また、宗教教育の一環として、バザーや任意参加の礼拝など、様々な取組みが行われていますが、教師主導の形態だけでなく、自発的な生徒主体のボランティア活動が広く行われると、キリスト教主義教育はよりその幅を広げると考えられます。

以上により、6年間の宗教教育の様々な取組みについて、内容の再検討、6年間を見通したカリキュラム策定、体験プログラム等の再検討が必要とされているのではないのでしょうか。松蔭のキリスト教教育が、在籍する全ての生徒一人ひとりの血となり肉となり、卒業後の人生の指針となるよう、さらなる充実を求めたいと考えます。

(2) 学校生活のなかで健全な人間関係を構築する指導を実施し、その効果があがっているか。

アンケートでは学校生活全般について、「松蔭に入学してよかった」「松蔭で良い友人ができた」「クラスでのいごこちは良い」の3項目があり、中学生、高校生ともに肯定的評価は82~96%となっており、生徒同士の人間関係は良好で満足度が高いことがわかります。

一方で、委員による授業参観の感想として、教員の服装、言葉遣いや声量、話す速さがまちまちであることや、同一科目のグレード授業であっても教授法が統一されていないこと。一部には、自分の一方的なイメージで授業をすすめていることになりかねない印象を受けたことを指摘しておきます。

また、教員と生徒の関係については、「悩みを相談しやすい」かどうかのアンケート項目で、肯定的な回答が少なかったことや、委員の保護者としてのこれまでの経験から、生徒と教員、保護者と教員との信頼関係が一部で不足しているのではないかと、という意見もありました。

以上により、生徒間の人間関係が良好であることは、高く評価できるものといえましょう。他方、教員と生徒、担任とクラスの生徒の間の信頼関係の一層の構築を今後の課題として、授業においても、生徒に信頼され、生徒との関係を確認して進めていく姿勢を身につけるよう、個々の教員は研鑽を積んでいただきたいと思えます。若手教員が人間的な幅を広げることができる研修を実施する体制をつくることも必要でしょう。

教員と保護者の関係では、担任との面談について年1回ではなく、頻繁に実施できるようにし、担任と保護者の間の信頼関係を深めるようにしていただきたい。

また、校内の制度として、メンタ（生徒の精神的な助言者・指導者）的な役割を担う者を置くことも、今後検討してもよいのではないのでしょうか。

（3）豊かな学力定着と進路実現をはかる教育が行われ、その効果があがっているかどうか。

授業に関しては、アンケートでは、「松蔭の授業に満足している」「自分は授業に集中している」などの項目がありましたが、中高ともに概ね満足度が高い結果となっていることは評価できます。

しかし、「ふだんから宿題以外に自主的学習をしている」という項目では、生徒の肯定回答は、30%前後に留まっています。また、高校生に対する項目で、「学校の授業・補習のみで希望進路に見合う学力が身につけている」については、77%の生徒が否定的に回答しています。

学校側はこのアンケート結果をふまえて、対応策として今年度より長期休暇中の補習制度の拡充、中学1年生では全教科から家庭学習課題を出すことなどの措置をとり、また2012年度より、高校2年生を対象に学内予備校を導入することを決定しており、改善をすすめているとの報告がありました。今後も希望する進路に見合う学力の育成をお願いしたい。

さらに、進路の決定等については、併設大学についての情報が、生徒・保護者に十分に提供されること。また、卒業までの期間に、内部進学生も指定校推薦などの制度で進路を決定した生徒についても、大学進学後に必要な基礎学力を身につける工夫をすることが必要である、との認識で委員会は一致しました。

上記（1）～（3）の他、委員会は今後の全般的な課題として、次の点を指摘しておきます。

- ・松蔭中学校、高等学校の「カラー」とは何か、「学校目標」「スクールモットー」について教職員が討議し、一致したイメージをもつべきではないか。特にこの10年間で若手教員が増加した現状では必要な作業ではないか。
- ・教育効果をより高める授業実践ができるよう、教員は研修を積んでいただきたい。
- ・女子校であることのプラスの意味をさらにはっきりとさせ、学力だけでなく、人間として、女性として大切なものを身につけさせることをより進めて欲しい。
- ・創立以来、神戸の街との関係は120年に及ぶ。スクールカラーやスクールモットーも神戸との関わりのなかで考える時、具体的にイメージできるものではないか。

以上、2011年度学校関係者評価委員会の報告とします。